
憂国者と超越者達の決起

ZX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憂国者と超越者達の決起

【Nコード】

N0787T

【作者名】

ZX

【あらすじ】

2011年1月24日、国家解体（売国）法案群可決して一カ月後。

少年「鷹取隆」は親友と「仮面ライダー」達と共に反日・売国勢力殲滅に取り掛かろうとしていた。

日本の未来は何処に

前編（前書き）

仮面ライダーの強さを表現する為に過激なまでに暴力的で残虐な描写が多数です。

前編は大した事はありませんが、中編からはそれらの描写が浮き出てくる予定です。

前編

日本列島は日本人だけのものではない、地球にとつては人間がいなくなる事が一番優しい等と発言してきた無能なマザコンがいた。

その男の名は鷹山幸織、地位は総理大臣。

しかしその男はただの総理ではない、何故なら「あの」村山を越える売国奴にして国賊なのだから。

その男と、彼が表向き支配する政党が掲げる「外国人参政権」、
「人権擁護法」、
「外国人住民基本法」、
「児童ポルノ禁止法」、
「情報通信法」、
「青少年ネット規制法」等等……どれもこれも国家を解体、及び日本国民を総犯罪者化させ、自分達の真実を隠蔽せんとするものばかりだ。

しかし、そんな悪魔としか言えない所業は…… 2011年1月24日、まかり通った。

「これらの法案を可決する」

「ふざけるな!!」

「日本を破滅させるつもりか!!」

その言葉に反発する正常な価値観を持つ議員達……だが、それも無駄に終わる。

「日本は俺達のものだあつ!!」

その国会の中継を見ていた南北朝鮮の人間は歓喜、狂喜のままにガラス瓶を持ち窓を割り、火を付け、国民に殴りかかる等の暴動を起こす。それにより都市は町は廃墟となりかける状況になったが……まだ地獄は始まったばかりであった。

「日本が移民を受け入れないのは自分に自信が無い事の現われですよって自信を持たせる為に中国から1000万人の方達を移住させ

ます！」

「前面の虎、後門の狼」としか言わざるを得ない、元々悪質だった南北朝・中の人間による犯罪が更に悪質となり、増加傾向であったアギト及びオルフェノクによる事件が更に増加している凄惨な状況で移民の受け入れ……それは今の日本国民に追い討ちをかけるものであった。

「見るお！　元々ゴミのようだったチヨツパリ共が更にゴミになっただぞ！！」

ある意味、地上の楽園とも言える国が、あの外国人参政権によって治安が混乱しているオランダ、そして北朝鮮を越える地上の地獄と化してしまった。もう平和な日々には戻れないのか……

しかし「地獄に仏」という言葉は相応しくないだろうが希望の光は民衆が考えるよりも多数存在していた。その希望の光は「仮面ライダー」である三人、そして、それに近い概念の存在に成ろうとする者達であった。

「ゆとり世代の不良共か……」

黒いコートを纏い同色の襟巻きを首に巻く少年は目の前にいる男達の風貌、雰囲気、行動を見てそう呟いた。彼の目の前にいる男達、一人は空瓶を持ち振り回し、一人は酒をグビグビという擬音が似合いうような表情と飲み方で飲んでいる、一人は踊り狂っている等の傍若無人という言葉が相応しい行いをしている。男達は七人、この数字に彼は嫌悪感を抱く。

「変……身！」

少年は左腕を引き拳を握り、右腕をこちらから見て左上に上げると腰にどこか嵐を象った金色の装飾を持つベルトが現れる、そして叫び、引き出した。自らが敬愛する存在の持つ力と同質の「それ」

を。

「ああ？」

男達は背後の少年と謎の光の存在に気付く。が、振り向いた時には少年の姿は無い。代わりに光に包まれた人影を見つけたが、その人影を包んだ光は消えてその全貌を現す。そこにいたのは黄金の角を持ち丸く大きな目を赤く輝かせ、金を基調とした鎧を纏った謎の怪人、もとい戦士　アギト。

「ゆとりの犯した過ちは……>ゆとり<である俺が肅清する！！」
アギトである少年は男達に向けて挑発とも受け取れる宣言を発した。

「かつこつけんなあ！！」

男達はまだ悪態を貫き叫んだ。すると彼らの雰囲気体が「まるで別人のように変貌し始めた　身体が灰色に変色したかと思うと、そのまま異形の姿と化す。その造形はまるで動植物であった。変化し終えた彼らは一斉に跳躍　アギトに襲い掛かる。

「てめえら、日本人に……生まれ損なつたな！！」

その一声と共に腰のベルトの右部分を右手で押したアギト、次の瞬間その部位を押しした右手が、右腕が赤く変色したかと思うと、胸の鎧も赤を基調に変色した。そしてその右手は素早くそのベルトの中心部に添えて得物を得る。その得物は刀剣……フレイムセイバー！。

「！？」

彼らが自身の危機を感じた時には遅かった、気付いた瞬間にはもうフレイムセイバーを携えたアギトが目の前に迫り刀を落下しているであろう男達の上半身目掛けて水平に振るっていた。一人、二人、三人、四人、五人、六人　こんな戦法……「通常」の人間では取れないだろう。

何故なら、それは少年がアギトであり且つ人を殺し慣れている証拠なのだから。

「ひいつー!!」

次々と上半身と下半身が分断されていく仲間達を見て恐怖を感じていたが、既に遅い、悲鳴を上げた彼は最後の一人となり、彼は下半身に違和感を感じたのが人生最後に味わった感覚となった。

動かなくなった灰色の彫刻達は青白い炎を上げて燃え上がり塵となるのみ。

「腐りきったこの時代に生まれてこなければ、苦しまないでいられたものを」

口元に笑みを浮かべてそう呟いた少年、その言葉は彼らへの哀しみから生まれた言葉ではない事は明らかだが、そんな彼は何処かへと歩く。

「まったく、日本人のモラル低下には本当に首をかしげるばかりです……在日の方々が犯罪を犯すのは我々日本人が悪い民族だからだ」といつのこ」

「そうですね、振旗さん」

テレビに移る彼らの「妄言」、そんな事を毎日のように聞いてきた国民はお約束事のように苛立ち声を上げる。

「ふざけるな!!」

と。それを見ている少年、アギトに変身して戦い、杏殲滅を終えた彼もその一人であった。

「（穢れた国賊共が）」

それを心の中で何回呟いたことだろうか、少年はただ呆れるしかなかった……彼らの愚行に、卑劣さに。いつものように苛立ちながら

ある場所へ向かった。

「鷹取、戻ったのか」

「ああ」

親友らしき少年に鷹取と呼ばれた者、その鷹取こそアギトに変身してオルフェノク衆を虐殺した少年「鷹取隆」であった。二人は

「ブラブラしてたら不良共が七匹いてな……処分してやったよ」

「そうか……」

平然とそう話して見せた鷹取、彼はそんな答え方しか出来なかった

彼も鷹取と同じ人殺しだからだ。

「ち、ただ戦ってるだけじゃ駄目って事位分かってるのよ……」
拳を握り疲労感と共に悔しさを露にする鷹取。

「だからと言って諦めるわけにはいかない、この手で、この腕で、この身体で……あの国賊共を徹底的に痛めつけ、晒し者にしてやる」と口元を歪ませドスの聞いた声で言い放った鷹取は目を血走らせる。

「しかしこの世の中を救う為に戦おうと思っている人間がどの程度いるかどうか……」

「だったら、俺にもお目当ての人がいる」

少年の言葉に答えた彼は、ある者の名前を挙げた。

「2年前程に行った事があるレストラン・アギトの店長、いや仮面ライダーアギトと呼ばれている津上翔一さんだ」

「な、何だって!？」

少年は鷹取の挙げた名前に驚愕の反応を取った。

「2年前にレストラン・アギトが良いファミレスだから食べに行こ

うって親父が言い出して、そこで飯を食った事があってな……」
「その縁でか？　しかし、何でその人が、最強のアギトくだって分かったんだ？」

鷹取の言葉を聞いて、疑問に思った点を述べて問い掛けた。

「食べ物に行つて車に乗つて帰ろうとした時にな……」

彼はその問い掛けに懐かしそうに答えた。鷹取の説明で少年は彼の思い出を知る事が出来た、レストランアギトに最初に食事しに出かけた事、そして父親が運転する自家用車に乗ろうとした瞬間、そこにアギトとオルフェノクの暴漢達が現れ彼らを鎮圧する為に人前で変身してたつた三分以内で鎮圧したのが店長「津上翔一」であった事。その津上が変身したアギトが「他の」アギトと違い銀色を基調とした鎧を纏い、その顔は赤い角を備え、瞳は通常のアギトの赤と違い黄色であった事。

「まさか、そのレストランまで行くつてか？」

「ああ」

少年の問いに鷹取は一言だけで返した後、背を向けた。

「お前、場所は分かつてんのか？」

「安心しろ、道のりは覚えているさ」

鷹取は少年にそう返すと脚を自らの向いている前へと動かす。

「長旅になりそうだな……」

「長旅になるかどうかは分からんが、戦いに比べれば楽なものだ」
愚痴をこぼして鷹取にそう返された少年は面倒臭く感じるが前方に目を向かせながら歩いている。

「嫌な時代じゃ……わしより先にせがれが逝つてしまうなんて」

しゃがみ込んでいる老人がそう呟いた、それは小さかったが彼らの

耳に入る事は出来る音量だった。

「俺達はどうせ助からないんだ……」
若者が低い姿勢でそう呟き、例え聞きたくなくても音量上、間隔上、必ずと言って良い程耳に入るのだ。

「早く、ここを出よう」

「あ、ああ」

鷹取の言葉に素直に従う少年、それはやはり彼らの、一般市民の嘆きを聞きたくないからであろう。

「（……嫌な時代だが……>一部の層くには黄金時代なんだろうな）」
先程の光景を思い出しそう考えながら、鷹取は少年と共に自分達が居た街を出たのだった。

かつて三人の戦士が人に失望した神を正した地、日本。しかし今では「北朝鮮」、中国に並ぶ、もしくはそれを超える「地上の地獄」と化してしまった。そんな中、絶望的な状況で日本の為に平和を勝ち取る為にと戦い続ける者はいた、それは「アギト」もしくは「オルフェノク」の力を備えた（備えてしまった）人間達、少年「鷹取隆」はその一人。日本を地上の地獄に変貌させた元凶である「反日」勢力は未だ健在だ。

「後、何時間位で着くんか？」

「だったらここでレースと行こうか？」

と彼に問い掛けた少年、歩き続ける中、鷹取はそう返した後、左腕を引き拳を握って右腕を自分から見て左上に上げる。

「まあアギトで走れるだけ走ってみた事は無いしな」

少年はそう言うと、両手を腰に当てた。すると彼の腰に鷹取の事象と同じようにベルトと思しき装飾品が現れた。

「変」

「身」

自分達が敬愛する存在と同じ力を引き出す構えを取り、発声の二文字の言葉の一字目を鷹取は強調して叫び、最後の二文字目を少年は強調して叫び……二人の発生と重なるように光が彼らの腰から発せられた。

「よし」

光が収まった時、そこに存在しているのは金色を基調とした鎧の身体を持ち黄金の角を一对の複眼の間に備えた者が二人……それは彼らが変身した「アギト」だ。

「青になるなよ？」

「俺の言いたかった事を述べてくれるなんてな」

少年の言葉に鷹取はそう返した後、そのアギトとなった身体に、足に意識を集中する。

「いくぞ」

鷹取の一声で彼らは自らの出せる力を出して一斉に駆け出した。

「走る事がここまで爽快に感じられるなんてな!!」

「アギトやオルフェノクでしか味わえない気分だろうな……!!」

走りながらも少年は鷹取と会話を交わす、これは彼らが「普通」の人間とは違っている事を表す場面の一つだ。

「（アギト、オルフェノクは、俺達くには良くも悪くも、強い力くでしかないという事だな）」

鷹取はアギトの身体で走りながらそう思った、そう考える理由はやはり「アギト」と「人間」の格差、アギトやオルフェノクの力を使用した事件が背景にある事だ。

「鷹取い、お前レストランアギトがどういう形の建物か覚えてるんだろうなあ!？」

「当たり前だ! 俺の尊敬して止まない人が経営している偉大なるレストランだぞ!！」

少年の問いに誇らしげに答えた鷹取、二人の顔は「オルフェノク」と違って「没個性」と同意義であるが表情は分からなくても口調で店長でもあり最強のアギトである「仮面ライダーアギト」を尊敬している事が見て聞いて取れる。

「お前でも分かるぞ、何せレストランアギトの看板があるんだからな!！」

「そうか!！」

鷹取の補足にそう答えた少年、彼らが走り出してレストランアギトに到着するまで……おそらく半日どころか、その半分の三時間もかからないであろう。何故ならアギトに変身すれば走って車要らずで遠くへいける速度と持久力を持っているからである。

「(しかし、車は全然走っていないな……)」

鷹取はそう思いながら走っている、自らが生きている国がどんな現実にも直面しているかを改めて感じる事が出来た。この場面の遭遇は彼にとって不幸か否かは定かではない。

「そういえば……時計の時刻を見るのを忘れてたな、これじゃ出発地から何時間でレストランに到着したか分からん!」

「そうだったな!」

そんな他愛の無い会話を交わしながら走っている二人、さて彼らは

街を出て2時間足らずで目的地に辿り着くのだが……それはしばらく置いて……綴ろう、ある男の孤独な戦いを。

「物騒な世の中になつたな……」

青年はそう呟いてバイクを押しながら歩いている街路の周りを見渡した……おそらく「アギト」、もしくは「オルフェノク」の力によつて生まれたであろう瓦礫の山、何か勢い強く飛ばされた物体で碎かれたであろう窓ガラスと今の日本の現状を突きつけるかのようにガラスの破片が散らかっている。

「ウエーハツハツハツハ!!」

その奇声、いや笑い声かと共に何かが割れ、その音の出本を何処かと彼は目を動かし、それを見つけたかと思うと其処から六人の男達が少し慌しい様子で出てきた……瓶を投げつけながら。

「……あれが日本でコソコソ動いていたと言う在日か……」

彼らの顔を見て数年前ほどに自分が配られてもらったチラシの内容を思い出した、マスメディアの腐敗の原因、学校で学ばれた歴史の嘘、左派勢力の工作活動即ち悪行が書かれたものだ。

「おい……このチョッパリい、何見とるんじゃあ!!」

青年に気付いた男達の一人が声を上げ、彼に向かって駆け出して殴りかかってきた。

「ふん」

だが青年は怖気つく事なく、片手で彼の拳を掴んで受け止めた。

「おんのれええっ!!」

屈辱だったのか声を荒げて拳を、身を引き再度殴りかかったが、青年はまるで手馴れてるかのような表情で右に回避、腹部に膝を当て

た。

「そ、そんな弱小民族のチョッパリが……同胞を振り返りにしただと!?」

先程の光景がまるで悪夢だと信じたいような男達の一人……その男の言葉が耳に入った青年が彼らに自らと彼らの差を突きつけるように口を開いた。

「2001年から俺は戦い続けてきたんだ……その俺が小悪党に負ける理由が何処にある?」

彼の言葉を聞き、その目を見て情けない声を上げて怯える男達しかし、その内の一人は怯えるどころか驚愕して声を上げた。

「2001年……!? はっ、まさか貴様はアンノウン事件を解決したと言う、あの三人の>仮面ライダー<の一人か!?!」

男の問い掛けに青年は

「小悪党に>その名<で呼ばれるなんて……大したもんだな、俺も」と嫌味を吐く口調で返答した。

「小悪党だとお? 言ってくれんじゃねえかあああつ!!」

彼の言葉に苛立った男は腹部に意識を移すと無機質で、どこか神々しい配色の装飾品が腰に具現化した。

「てめえら、変身するぞお!!」

青年の言葉で激昂していた男の一声で怯えていた男達は一斉に身構え腰に装飾品を具現化させた、ただし青年に振り返りにされ気絶している者を除いてだが。

「数で押しつぶしてやる!!」

その言葉と共に彼らが光を発し、数秒後に輝きが収まった時、そこには金色を基調とした鎧を纏った六人がいた。

「死にたいのか？」

呆れた表情でそう言い放った青年は両腕を交差し叫んだ。

「変身！」

叫んだ直後に両腕を直すと、次の瞬間、彼の体の変貌が始まった。身体が不可思議な深緑色を放つ滑らかな質感を持つ何かに覆われて、その身体を覆う物は形を変え、外見を昆虫のような造形に変化させた。

「ウウウ……ハアアツ！」

その発声と共に「戦闘形態」と言うべきもう一つの姿を表した青年

彼は三人の仮面ライダーの一人、ギルス……仮面ライダーギルスだ。

「ギルス！？ し、しかし……例えあの仮面ライダーとは言葉、五人の俺達には勝てるわきゃねえだろお！！」

怖気つく彼らではあったが、男の一人の言葉で自らを奮い立たせ飛び上がりギルスに変身した青年に殴りかかる。

「フツ！」

彼らの行動に応え自らも飛び上がり……彼らとすれ違う瞬間、腕の一振り、一払いだけで彼らを地に落した。

「ひ、ひいつ……」

地に落された男達の一人が臆病者のように声を上げた。数では相手が圧倒的に劣勢の筈なのに一瞬にして、その差を覆した。その事実、そして身体で味わった彼の戦闘能力に恐怖し怯えすくむ。

「自分の実力を見極めようとしないう人間は死ぬぞ？」
と言いつつ涼、その一言で彼らは声を上げ変身を解き、慌ててこの場から逃げ出した。

「おい、おい」

そんな彼らに気にも留めず自らが気絶させた男に声を掛け、それに目が覚めた男は一瞬身を屈めたただのが彼はそんな事は気にせず先程の有事を説明する。

「い、痛い目に合わせないでくれ!!!」

男は彼に立ち向かおうとせず、立ち上がった直後は駆け足で逃げた。

「近い内に奴らと戦う事になるんだろうな……」

青年は「ウンザリ」と言いたげな表情でそう呟いた。

「（仮面ライダーか……こんな俺がヒーローの名前で呼ばれるなんて思わなかったよ……）」

青年は過去を振り返り思いに浸かる。彼は心の中で他者が一方的に呼称する自分の称号を復唱するのだが、その表情は嬉しそうだった。かつて彼は亡き恋人に「化け物」と面と向かって言われた事があった。>ギルス<であるが故にだ、他者に恐怖されるのは自分でも思っていて気付いていたのだが……実の恋人に言われた時は悲しいと感じるよりも苦しかった。

「（氷川や津上だけじゃなく俺も仮面ライダーと呼ばれているんだ……期待には出来るだけ応えないとな）」

彼は戦友の名を心に過ぎらせて、自らを仮面ライダーと呼称する人々の為に生きる事を戦う事を決意して心中でだが名乗りを上げる。

「（俺は葦原涼……仮面ライダーギルスだ）」
彼はこの思いを忘れない為に変身し、バイクもその変身の要因である力で変質しギルスに酷似した色彩、造形に変化する。彼はそれに跨り何処かへと去った。

「お客さんか……久しぶりかな？」

青年が扉の向こうから来た二人組みに声を掛けた。その二人組みこそ「鷹取隆」とその親友であった。

「おや、君は2年前来たお客さんだったね」

「覚えててくれたんですか」

青年の言葉に一瞬驚愕する鷹取。

「2年前の……あの時は今でも覚えていますよ。あなたが居なければ俺はここには存在していません、津上翔一さん……いえ仮面ライダーアギト」

鷹取は青年の名を呼び感謝を述べて、彼のもう一つの姿の通名を言い放った。

「仮面ライダーか、誰が付けた名前か分からなくて」

「仮面ライダー……あれはアギトの外見が、テレビの特撮番組の変身ヒーローと共通する点があったから人々がそう呼んだとネットで見ました。」

青年、いや津上翔一の疑問の声にそう答えた鷹取。

「何でここまで来たんだい？」

「あなた、いえあなた達、仮面ライダーの力を借りに来たのです。この日本をあの独裁者達から救う為に」

津上の問いに答える鷹取、そんな彼の目は親友は本当に輝いて見えた。

「暴力を使わないと解決出来ない事態なのは分かっているけど……立ち向かうには数が足りない、葦原さんは行方が分からないし、氷川さんはアギトやオルフェノクの暴動の鎮圧で忙しくて、しかも朝鮮・極左側の警察の上層部と戦っていると知らせてから連絡が中々取れないし」

「三人の仮面ライダーの内の二人であるギルスとG3-X……」
津上の言葉で出された二人の名前で、その二人の通名を口に出した鷹取。

「でも……俺達があなたと出会えた事だけでも良かったんじゃないですか？ 俺達はこれから作るレジスタンスの記念すべき三人になるんですよ？」

「て、てめえ……競争中に俺が話した目的を言うんじゃないよ……」
親友に先越されたと言わんばかりの表情で返した鷹取。

「レジスタンスか……いづれは戦わないといけないと思っていたんだ、良いよ」

「快く受け入れてるんですか？」
津上の賛同の速さに疑問を思った鷹取は問い掛ける。

「快くは無いよ、人間を沢山殺す事になるからね」
津上の答え、その言葉には「同情」できた鷹取、しかし「反日殺し」である彼は、ただ同情しているだけである。

「しかし、ありがとうございます……これで極左政権打倒の初歩を歩めました」

鷹取は津上に頭を姿勢を下げて感謝の言葉を述べる。

「いきなりだけど君に教えてもらいたい事があるんだ……お父さん

とお母さんはどうしたんだい？」

鷹取がお礼を述べた直後の唐突な問い、その内容に彼は態度を崩さず応えた。

「去年のある休日、両親と一緒に出かけっていた時、オルフェノクが襲い掛かりましてね……その時にアギトに変身して殺したら化け物と恐れられ、来ないでくれと言われましたよ」

「悪い事聞いちゃったね……ごめん」

鷹取の言葉で津上は申し訳ないと思ひ謝罪した。

「津上さんがアギトだった事については頼もしさを感じていた癖に、俺がアギトに変身したら化け物呼ばわりです……自分達の命が危険に晒されると思ったんでしよう」

鷹取は「家族との絶縁」を表情を少しも崩さずに語る、無論演技ではない。それが聞かなくても分かる事が津上の心を曇らせた。

「その時は俺を頼ってくれたんですけどね、家族も事情を分かかって受け入れてくれました」

「そうだったのか……」

鷹取の親友の補足に、一先ずの安心感を見せた津上。

「今日は君達、疲れただろう？ 泊まっていつてくれ」

「お世話になります」

空気が重くなつた場面を吹っ切るような笑顔を見せた津上の誘いに、鷹取の親友はそう返して今日を彼のレストランで過ごす事に決めて一息入れる。

「（仮面ライダーギルス、G3-X……まずは氷川誠さんに会わなければ……いくら歴戦の戦士で対アンノウン用に作られた装備の装着者でもアギトと戦い続けるのには無理がある）」

鷹取はこれからの計画を考えて一つの目的を達成する為に近づこうとしていた、目的とは無論「救国」であり「反日売国勢力殲滅」だ。

「（この二人は、これからも人殺しをしなくちゃならないのか？）」「鷹取が考えに耽っていた時、彼もまた考えていた、どうすれば二人が人殺しをしなくても良いようになるのか、どうすれば今の日本で苦しんでいる人々が救われるかを……。」

前編（後書き）

反日や売国勢力への怒りから書きました。

自分は頭が悪いので粗雑な話になるでしょうが、頑張って書きます。ちなみにこの作品はブログで連載している二次創作「頑魂」の前日談の一つです。

中編 其一（前書き）

ブログで書いていた中編ですこれ、PIXIEV版では鷹取の初変身の場面からの始まりを予定していたり……

この作品のネタバレは現時点ではブログを見れば分かると言っ図式。今回から一応の流血表現や残虐な表現が多々出て来る予定です。

中編 其一

「身体が熱い、頭が痛……い」

少年は悲痛で弱弱しい声で苦痛を訴えるが、異様な感覚を抱き父親はただ見てる事しか出来なかった。

「うう……」

次の瞬間、少年の腰に装飾品が出現した。その装飾品は……

「アギトのベルト！？ そんな……この子はまだ幼いんだぞ！？」

父親はその装飾品を視認してテレビで視聴して知ったアギトの存在、外観の特徴を思い出し不安と絶望感を吐露した。

「うわああああっ！！」

少年の苦痛から生まれた叫びの直後、「不思議」としか言えない光景が現れた。彼の腰に出現した装飾品が灰色に変色、そして形が見る見る変わって行った。

「い、一体何が！？」

先程の光景に驚愕して声を上げる父親、そして少年の呻き声が止んだかと思つと彼はその幼い瞳で父親を睨み付けた。

「パパ……僕は知っているよ？ パパがママに内緒で他の女の人とデートしていて……難しい漢字で書かれた白い車に乗って大声上げて他の人に嘘を付いてた事を」

父親は息子である少年の態度の変貌と述べられた事実には驚愕した……>いつ知られたのかと

「ち、違う……あの女の方はパパの昔の友達で久しぶりに遊ぼうと

約束してただけなんだぞ？ それに白い車で大声上げて迷惑を掛けていたなんて、ただ皆に僕達日本人は悪かったって、平和を大切にしようと言っていただけだよ？」

息子の指摘にそう返した父親、息子の述べた「白い車に乗って大声上げていた」とはつまり「街宣活動」の事であり、尚且つただの街宣活動ではない。左派にありがちな「憲法九条改憲反対」運動だった。

「嘘つかないでよ、僕聞いたんだ……パパが白い車に乗って大声上げている時、僕の前にはいた人が、日本人は悪いなんて嘘を付くな、平和を大切にしようなんて御金が欲しくてそんな事を言ってるだけの癖に……」

「そ、それは……」

豹変と言うよりは抑えていた怒りをぶつけているであろう息子を目の前にして怖気付く父親。

「僕は見ただ、家でパパが……デートしている女の人にママよりも愛していると言った所を、怪しい人達からお金を貰ってる所を」

「ひ、ひい……」

明かされた自分の不都合な真実、今の息子を前にして彼は反論する所か反論しようと言う考えを持つ事は出来なかった。

「僕は知っているんだ……ママが早く天国に行ったのはパパの所為だ……」

「ち、違う……私の所為じゃない！」

息子の言葉にそう返した父親……その目からは滴が零れ落ち始めている。息子は振り返っていた、自分の父親が母親を見捨てて他の女性と浮気していた事を、母親の首吊り自殺の遺体を見た時の衝撃、苦痛、悲しみを。

「パパを信じていたよ、いつかは悪い事を反省してくれるだろうって信じていたよ、いつかまた僕とママがパパと一緒に幸せになれる日を」

少年が心情を明かした後、既に変化し終え、生き生きとした金色からまるで骸骨のような灰色に変色、変質した装飾品の中央の宝玉から青白い光が弱弱しくも力強く輝いている。

「信じなきゃ……良かった」

その一声と共に少年の姿の変貌が完全に始まった。顔の瞳が一瞬灰色に変色し、等身が何かの幻影と重なり、その幻影が実体と化してそれに埋もるように幼い少年の姿が見えなくなる。そして少年のいた筈であろう場所に存在するのは……飛蝗若しくは蝗のような造形の姿を持ち生命を持った灰色の彫刻。

「やつ、やめてくれ、許してくれ、殺さないでくれ、助けてくれえ

……！ 照夫おおおおっ！！」

父親は汗を流し身体を震わせ少年の名を叫ぶ、それは彼の最期にして贖罪の瞬間の他成らないものであった。

「ぎゃあああああぁあつ！！」

父親は目の前に迫った灰色の手に怯え竦め絶叫した、少年は自分が父親と呼んでいたその頭を掴み、蜜柑のような果物を握るかのように指に力を入れ徐々に力を強めて……最終的に赤い水溜りを生み出した。

「……さようなら」

少年は、いや直翹目を模る怪人の身体を持つ彼は別れの言葉を告げる。忌まわしき記憶のアルバムとも言えるこの空間にだ、故に少年は物品を破壊したいという思いに駆られ片手を掲げると鮮やかな球状の光が具現化し……それを忌々しいと思う物を地に投げ付ける

ように放った後、何処かへと去る。

「氷川さん、民間人から通報が!!」

「……どうしたんだ？」

後輩らしき男が上司であろう青年に通報があつた事実を知らせる。

「通報によれば……灰色の身体をしたアギトのような怪物が現れた
そうです!」

「灰色の……? まさか木野さん以来の新しいアギト？」

「氷川」は後輩の言葉にあつた、灰色く、アギトくという言葉に
反応した。

「分かった、直に向かう!」

氷川はそう返して、この場から走り去ると後輩である男も彼を追いかけた。

「G3-Xとして戦うのも一年ぶりか……」

氷川誠は自らの目の前にある物体、いや装備品を見つめてそう呟いた。

「先輩、俺はG5を装着したら何をすれば良いんですか？」

「援護及び民間人の救助に当たってくれ」

氷川誠は目の前にある装備の内の上半身の鎧を装着した直後に、
一対の手甲、腕鎧を装着し自らの身体に装着した、そんな行動の最中に
後輩の問いに答え、後輩である青年はその場から立ち去り、「G5」
の装着を行うのだった。

「G3-X、起動!」

氷川がいるトレーラー内でオペレーターであろう女性の声が鳴り響いた、それは彼が鎧、パワースーツである「G3-X」の装着

が終了した事を表した。

「先輩、オペレーションは初めてですが宜しくお願いします」

「こちらこそ」

新人もしくは後輩であろう女性の呼びかけに答えた氷川はトレーラー内に置いてある白いバイクに跨った。

「先輩、G5装着完了しました！」

氷川のマスクに聞こえてきた後輩の青年の声、通信の事実を彼の行動及び雰囲気から確認した女性はある一言を発した。

「出動!!!」

その発声と共に揺れるトレーラー内、それはトレーラーの出動を表すものであった。

「あれはアギト……？ にしては色が……」

現場に駆けつけた彼ら……氷川は目の前の方向にいる飛蝗怪人の存在とそれに注目して傍観者になっている者と彼の姿を恐れて慌しく逃げる者達の二派の民衆を視認、右足から銃>スコープオン<を取り出しそれを向けた。

「仮面ライダーG3 - X、本当にカッコいいなあ……」

「え!？」

こちらに気付いた灰色の飛蝗の彫刻から漏れた感嘆の声を聞いて動揺、困惑したG5の装着者、それを聞いた氷川も驚愕せざるを得なかった。

「こゝ子ども!？」

その一言と共に動揺した事により銃>スコープオン<を落したG3

- X、そんな時怪人はこちらに向かって歩み寄った。

「灰色の怪物がこちらに!？」

G5装着者の青年が灰色の彫刻に警戒しG3-Xの装備のスコープオンの同型の銃を右足から取り出し構えるわけだが、>彼の威圧的な雰囲気、そしてその造形に似合わない幼い少年の声により怯えて引き金を引けない……いや引かなくて良かったのかもしれない。

「どれだけ強いか……確かめたくなつたよ」

「何だつて？」

飛蝗怪人に変身しているであろう幼き少年が氷川とすれ違い様に放つた一言は少年の初戦が始まる事を表していた。

「うわ!？」

飛蝗怪人がいきなり腕を突き出し、氷川は思わず声を上げながらも横に逸れて回避して見せた。

「せ、先輩! くっ」

G5装着者である青年は目の前の灰色の飛蝗怪人に恐怖を抱きながらも銃口を向け引き金を引こうとする、しかし

「余計な事はしないで」

その一言と共に青年の方向へ振り向き片手を広げると、中央付近から光球が出現、それは青年の武器に目掛けて放たれた。

「ひええっ!!」

情けない声を上げる青年、構えていたスコープオンの全長の半分が光球に飲み込まれた事が要因か溶解している。

「(さっきの攻撃、食らってしまったら……!)」

先程の光球の威力を見てG3-Xのマスクの中で額に冷やかな汗

を浮かべた氷川だったが、灰色の飛蝗怪人にすぐさま殴りかかった。しかし一方の相手は回避行動を取る素振りを見せず片腕を動かし強固な金属に覆われているG3-Xの拳を受け止めた。

「硬いね、やっぱり……」

とG3-Xの拳を受け止め質感の感想を述べた飛蝗怪人、彼の言動や態度からして戦力に圧倒的と言える程の差があるのは明らかである。

「先輩から離れる！」

そこにG5の拳が灰色の怪人目掛けて放たれたが、それも易々ともう一方の片腕で受け止められた。

「御兄さん達と比べると変身している僕はどうも強すぎるみたいだね」

そう言い放ち両腕を下ろした、その相手の突然の動作に困惑し一瞬動揺する二人。

「お前……遊んでるのか!？」

「遊びじゃなくて練習だよ……僕は変身したばかりなんだ」

青年の問い掛けにそう答えた灰色の怪人、そんな返答に呆気無いと言いたげな態度を取った青年だった。

「変身したばかり……?」

「うん、御兄さん達は今の僕には打って付けの相手だよ」

氷川の問いにそう返した灰色の怪人、よくよく考えれば強大な敵と言っても過言ではない相手に問い掛ける等一般市民から見れば非常識かもしれない。

「御兄さん達と戦えば僕も少しは強くなるかもしれないからね」

「……だから待っていたのかい？」
灰色の怪人が言った事実には驚愕した氷川。

「御兄さん、見ている人達は戦うのを待っているみたいだよ？」
「僕達が戦う所を見世物にされるなんて」

灰色の怪人の一言に自らの本心を吐露してしまった氷川、次の瞬間灰色の怪人は腕を突き出し氷川はそれを回避し戦いが再開された。

「おお、すげえ！」

傍観者に徹している一般衆の中の一人の茶髪の青年が声を上げた、不謹慎ではあるが思わず大声を上げたくなるかもしれない……青き鎧を纏う戦士>G3-X<が灰色の怪人が突き出す拳を回避し、反撃と言わんばかりに足を挙げ膝を当てんとするが片手で防がれる、今度は腕を突き出し拳を放つがそれも当たり前と言わんばかりにもう一方の片腕により防がれる。援護側はただ彼らの戦いに巻き込まれないよう一般大衆と同様に傍観者に徹するしか無かったのだが悔しい事に後輩である青年は二人の戦いに目を奪われていた。

「まるで映画の格闘を見ているみたいだ」
援護側である後輩の青年の言葉を裏付けるかのように、G3-Xを纏う氷川と灰色の怪人が互いに放たれた拳を脚を上体を逸らし跳躍する等して回避している。

「御兄さん、変身している僕と比べたら強くないのに……ここまで戦えるなんて」

「アンノウンと戦っていた頃、襲われている人を守ろうと救おうと僕は動いていたんだ……！」

だからこんな事で負ける僕じゃない！ そう言いたげな口調で灰色の怪人の問いに答えた。氷川は格闘家のように身構えているが灰色の怪人は構えていない。それは両者の戦闘能力の愕然と評して

過言ではない差を表す光景であった。

「だけど……御兄さんではアギトに変身する悪い人達をやっつけられないだろうね」

「いきなり何を言い出すんだ!？」

灰色の怪人の呟きを耳にして思わずそう叫んだG5の装着者である青年。

「……多分、そうかもしれない」

灰色の怪人の発した一言にそう言わざるを得ない氷川。それは1、2程前に彼がアギトの攻撃（それを仕掛けた本人が事実上不本意とは言え）を受けた過去がその反応を取った事の要因の一つでもあった。

「仕掛けてこないのかい？」

「僕はあくまでも御兄さんと戦いの練習をしたかっただけなんだ……もう充分だよ」

氷川の問いにそう返して実質的な戦闘の終了を宣言した灰色の怪人、そんな彼の一言に驚愕せざるを得ないG5装着者である青年。

「くっ、お前……ふざけるな!!」

青年が灰色の怪人に勢い付き抗議の声を上げる。

「ふざけてるつもりは無かったのに……」

青年の抗議にそう返した灰色の飛蝗怪人は背を向け現場から去る事を暗に告げる。

「待ってくれ、君は……これからどうするつもりなんだ？」

「御兄さん達と同じように悪い人達をやっつけるつもりだよ」

氷川の問い掛けに灰色の怪人は振り返ってそう返答した後、腰の灰

色の装飾品の中央部が光輝き身体が浮遊したかと思うと何処かへと飛び去っていた。

「アギトってあんなにも漫画やアニメのキャラクターみたいな事が出来るんですか、先輩？」

「いやそんな事は見た事も聞いた事が無い、あれは多分……あの子特有だ」

少年の能力を見て氷川に問い掛ける後輩、その問いを否定する彼はまるで自分が普通の人間では無いと面と向かって言われたような感覚を覚えてしまった。まあ錯覚だとしても間違っではないのだが。

「今更気付いたんですけど……先輩、あの怪人に名前や家族構成を聞くの忘れましたよ？」

「何処かでまた会った時に聞こう」
後輩に指摘されてそう返した氷川は青年と共にトレーラーに向かい帰還するのだが、先程の戦闘があつて何にも考えていない筈は無く帰還の最中、激闘の日々の到来が来る事を思うと将来を憂えざるを得なかった。

中編 其一（後書き）

鈴木照夫の登場理由は

某二次創作でアーク（略）がアギトみたいに必殺技を出す場面があった事の影響と造形の好みです。

其二で父親殺しを誤解（？）からやってのけた照夫が後悔する場面と最初にオルフェノクに覚醒した者との戦いやオルフェノクと名付けられる過程をやる予定です。

しかし親殺し設定の人物が主人公側の時点で非難轟々と言った所？

登場人物紹介（前書き）

Gジエネ風味です、後色々なネタバレがあります。

更新は遅いです、理由は自分の未熟さとブログの真価たる二次創作です。

登場人物紹介

葦原涼 変身態：仮面ライダーエクシードギルス

性格：強気 MP：400

射撃：5 格闘：37 反応：34

守備：29 指揮：9 魅力：10

キャラクターアビリティ

熱血

豪傑

悪運：HP50%以下時、回避率+10%

仮面ライダー：格闘必殺射程+1、向スキルを持つ者同士の支援攻撃時与ダメージ10%

詳細：一番上に来ているのはアギトで一番好きなライダーだからです。

頑魂の前日談「憂国者と超越者達の決起」でと一緒に最初に出演。

津上翔一（本名：沢木哲也） 変身態：仮面ライダーアギト シャイニングフォーム

性格：普通 MP：450

射撃：6 格闘：35 反応：33

守備：30 指揮：10 魅力：11

キャラクターアビリティ

気合

豪傑

仮面ライダー

詳細：仮面ライダーアギトの主役で、姉がいたがアギトに覚醒した事が原因で自殺している。

この二次創作ではアンノウン事件を解決した三人の「英雄（仮面ライダー）」の一人と呼ばれている設定。

後の二人は無論上と下。

氷川誠 装着：仮面ライダーG3-X

性格：普通 MP：430

射撃：20 格闘：34 反応：32

守備：29 指揮：10 魅力：10

キャラクターアビリティ

気合

豪傑

仮面ライダー

詳細：「憂国者と超越者達の決起」で出演したのは葦原と津上よりも後の中編序盤辺り？

2011年1月24日に起きた国会での国家解体法案群の可決が原因で

警察は反日組織に堕ち果て、氷川誠の倫理観、正義感と戦闘能力の高さを警戒して

秘密裏に結成した部隊を睨めて襲撃したが

逆に返り討ちにされて、氷川誠の関係者及び賛同者から見限られた。現在、朝鮮・極左（反日）側の警察の送り込む部隊と交戦中。

本郷猛 肩書き：始まりの男 変身態：????

性格：強気 MP：440

射撃：5 格闘：36 反応：31

守備：31 指揮：11 魅力：10

キャラクターアビリティ

豪傑

仮面ライダー

詳細：実は頑魂の第三部「友愛を取り戻せ編」で出演する御方。

設定としては仮面ライダー第一作目の主役を演じて後々警察に入って警視庁総監になったというもの。

2011年1月24日に起きた国家解体法案群可決から反日組織に成り果てた警察を見限り氷川誠側に付いた。

間口正一 変身態：仮面ライダーミラージュアギト

性格：強気 MP：410

射撃：4 格闘：35 反応：33

守備：29 指揮：10 魅力：10

キャラクターアビリティ

豪傑

仮面ライダー

詳細：基はSICオリジナルのアギト。

今作では津上・葦原・氷川がアンノウンと戦っていた頃の中盤辺りでアギトに覚醒した設定。

ちなみに覚醒した切欠は飼い犬の散歩の途中でのドッグロードとの対峙

それでアギトに覚醒して戦闘、殴ったり蹴ったりでどうにか倒した。本人はそれ以来アンノウン側が襲ってこないのが普通通り過ぎていたが

アンノウンが襲ってこなかった理由は津上・葦原・氷川との戦いに集中していた

且つ彼の存在を把握していたのが倒したドッグロード一体のみであったからだ。

ちなみに彼が「アギト」から「ミラージュアギト」に変貌したのは過去に変身途中でオルフェノクに攻撃されたからである。

鈴木照夫 変身態：アーケアギト

性格：強気 MP：400

射撃：15 格闘：33 反応：34

守備：29 指揮：5 魅力：5

キャラクターアビリティ

咎を背負う者：攻撃力+15、機動力+15

仮面ライダーもどき：格闘射程+1

詳細：アンノウン事件が終結した一年後、アギトとオルフェノクの
上位複合種に覚醒した少年。

>覚醒（初変身）<した年齢は4歳で、父親を自らの誤解により殺
してしまった。

祖父母から父親が悪辣に変貌した過去を聞かされた彼は強い罪悪感
を抱いて

以後、父親を悪辣に変貌させた反日宗教組織を滅ぼす為、勉学に勤
めるようになった。

お蔭で同世代の並みの餓鬼より勉強が出来る。

覚醒して父親を殺害した後は特訓と称して氷川誠と初の戦闘を行っ
た。

鷹取隆 肩書き：反日狩り 主な変身態：アギト・フレイムフォーム

性格：強気 MP：400

射撃：1 格闘：25 反応：30（20）

守備：20 指揮：7 魅力：5

キヤラクターアビリティ

好戦：攻撃力・反応+10

残虐：残虐な性格、与ダメージ+10%

詳細：12歳でアギトに覚醒した14歳の少年。

アギトに覚醒した当時に表現規制問題に興味を抱き、そこから反日
絡みの知識を得た。

反日・売国勢力に対する怒りや憎しみのお蔭で残虐である。

アギトに覚醒した時が人生で一番幸せだと現時点で感じている。

救国思想を抱いているが、後々……

白秋隆也 肩書き：鷹取の親友 変身態：アギト

性格：強気 MP：420

射撃：1 格闘：25 反応：25

守備：30(20) 指揮：6 魅力：5

キャラクターアビリティ

気合

邪悪への怒り：攻撃力、守備+10

詳細：鷹取隆の小学校からの親友、身長は170cmと恵まれた体
軀の持ち主では160cmである。

アギトに覚醒したのは、が覚醒した一週間後である。

と違って残虐では無いが、売国奴の存在を許さない事に関しては
共通である。

実はアギト変身時での力は彼よりも鷹取が強い

その強さの根源は反日・売国奴に対する怒りと憎しみである。

登場人物紹介（後書き）

色々と微妙な性能になってしまっただけで申し訳ないです。

PIXIVでやった世界観説明（？）は後でやるかと……

しかし、重要な設定をPIXIVで公開なんて自分は何を考えているんだ……

世界観説明（前書き）

正直、何でこれをPIXIV限定にしようと思ってしまったの
だろうか
と思います

世界観説明

世界観

日本が数多の売国法案を国会で可決された後の世界。

実はとある組織は自分達が掲げる「ラグナロク」成就の為に「この」世界に干渉したり暗躍している。

とある組織については……ブログの頑魂の本編参照。

しかし海外のマスメディアは案外日本を見ているもので

日本のアンノウン事件及びアギトやオルフェノク存在を公表しているのだ。

治安や法律について

警察がアンノウン事件についての事実を公表しているのだ

AGIT?の力による事件が起きないかと震えて生活している人々が多数いたが覚醒する人々が出るので

政府はAGIT?の力による事件（暴動）が起きた際は、警察への通報もしくは事件現場付近にいる（かもしれない）であろうアギトへの変身能力を持っている人間による鎮圧を義務付ける法律「暴徒鎮圧法」を急遽作った。

無論、反日勢力がこの法律を無視する筈が無くニュース番組などで「この法律は殺人を肯定している」等の発言で利権目当ての下心と御馬鹿丸出しの工作活動を行っている。

治安？ 犯罪発生率が諸外国の平均の中程度にまで激増、毎年と言っても良い程二丁三桁の数の人間が死んでいます。

それで済んでるのはやっぱり日本は何だか言って民度が高い国なんでしょうね

EP党

日本の現政権の政党、実はかつては「友愛民主党」だったが

国家解体法案群を国会で可決させた後は「EP党」に改名したEPとはEarth of Peaceの略称である。

元ネタは仮面ライダーBLACKに出てきた敵組織の支配下にある政党。

カルト宗教

詳細：カルト（ってか反日宗教）に関しては前述の力の所為で

「鬼に金棒」ならぬ「狂人にAGIT?（及びオルフェノク）」である。

AGIT?

詳細：警察によるアンノウン事件についての事実公表で人々は超能力の一種で認識している。

実は「限りなく進化する」特性の力だが知っているのはアンノウン側だけなので人間達は知らない。

いや知るべきではないかもしれない。

オルフェノク

詳細：アンノウン事件が解決した一年後で確認された存在。

力はAGIT?に圧倒的に劣る上に上記の能力は無いが人間の心臓を攻撃して低確率とは言え

オルフェノクに覚醒させる能力を持っており攻撃された人間は高確率で灰になって死亡する。

オルフェノクに関してはAGIT?と同じく「暴徒鎮圧法」が適用されており

前述の能力の所為で鎮圧優先度ではAGIT?よりもオルフェノクが勝っている。

弱い者イジメじゃないよ！ 仮に弱い者イジメだとしても「弱い者イジメ」と言う名の汚物消毒なんだ

世界観説明（後書き）

正直、暴徒鎮圧法に関してはこれだけで一話の大半が作れそうなのに
自分の文章力があれな所為で遅筆で……
こっちを早く終わらせるべきだと言つのに……すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0787t/>

憂国者と超越者達の決起

2011年6月12日22時20分発行